



2020年5月号
第399号
bestopia.jp

パリ通信
第101号

COVID-19・ワクチンの開発を祈って

北里柴三郎を学ぶ(1)

はじめに

緊急事態宣言が解除された。この期間に我々は多くのことを学んだ。

私はCOVID-19（新型コロナウイルス感染症）問題に関連してペストを思い出し、カミュとダニエル・デフォーの「ペスト」を読んだ。「人間の罪」の連続性について旧約聖書の世界を深く考え「コレヘトの言葉」を読んだ。又独裁者の犠牲になった人を読み返した

個人的見解はともかく、今までに与えられていた日常生活を取り戻すには「ワクチン」しかないと思った。「抗体」という言葉も繰り返し放送されるようになった。そして思い浮かんだのが世界で最初に「抗体」を発見し、又、後にペスト菌を発見した北里柴三郎博士であった。

2年後の日本銀行券紙幣で夏目漱石に変わって登場することが決まっているが、日銀がCOVID-19を予期してこの決定したとしたら、驚異的な先見性と言わねばならない。我々はCOVID-19を絶対に忘れない為に、日々、北里柴三郎と共に生きることになる。北里博士は日本が誇れる矜持ある人格をもっておられる。今月はその素晴らしい日本人に挑戦した。（ペスト菌の発見は次の号になる）

参考文献は中央公論新社・文庫本「北里柴三郎（上）」及び

テルモ株式会社ホームページ「医療の挑戦者たち」である。

共に入手可能な著であるので多くの方に読んで頂く手引きとなることを願って記録に残したいと思う。

後半では466億という数字を考える。

経済対策ということで、我々の日常感覚から容易に頭に浮かばない大きな数字に混乱させら、理解を諦めていることが多い。歴史に残るアベノマスクから億・兆という数字を身近に感じるようにしてみたい。第2次補正予算が出され、国家予算の中味が益々分かりにくく、説明も巧妙であるから、理解するのに苦勞する。時として困難を感じ投げ出してしまふ。残るは「後世への債務」だけである。せめて、検察庁の問題は廃案にするよう行動しなければならないと私は考えている。黒川事案についてはベストピア2月号で既報した。

矜持ある日本人・北里柴三郎

北里 柴三郎（1853年～1931年）略歴、日本の医学者・細菌学者・教育者・実業家。

ロベルト・コッホ博士に師事し破傷風の治療法を開発するなど感染症医学の発展に貢献した。後年ペスト菌を発見し、「日本の細菌学の父」として知られる。

私立「伝染病研究所」創立者兼初代所長、土筆ヶ岡養生園創立者兼運営者、第1回ノーベル生理学・医学賞最終候補者となる。私立北里研究所、北里研究所病院（現・学校法人北里研究所）創立者兼初代所長、慶應義塾大学医学科創立者兼初代医学科長、慶應義塾大学病院初代病院長、日本医師会創立者兼初代会長、テルモ株式会社の設立者である。又、多くの優秀な門弟を輩出した教育者である。

1，幼少年期13歳まで・1853年～1866年

1853年（嘉永6年）1月29日熊本県阿蘇郡小国町で生まれる。

その半年後にペリーが浦賀に来航している。

6歳から8歳まで寺子屋に入り読み書きを習う。

柴三郎は生来、頑健で、負けず嫌いで、腕力があつた。この自慢の腕力を自制できる感性を磨き、精神力を涵養するために母の躰け方針で”他人の飯”を食べさせることになった。



9歳から2年間伯母の家に預けられ儒学者園田保の塾で四書五経の素読を受ける

11歳から3年間は母の実家に預けられ私塾に通う、漢籍や国書を学ぶ。

1867年（慶応2年）3年振りに家に戻り、両親に「時習館」に入寮することを願い、12月入寮した。

①その時の父の教え

「世間に出て頼るとは、一人たい。ばってん、広か世間ば渡るとに一人の力には限りのある。運が大事か。何かばなしえた人物は運ば掌中におさめとる」その運ば引き寄せるには「その方法はなか。王道もなか。ただ一心におのれの厚望に邁進するだけたい。そぎゃんしょっと、不思議な話ばってん、そん姿ば見て他人は自然と寄ってくる」「助け人たい。助け人ん現る。成功者には必ず恩人がおるもんたい」

②母の教え

「世の中、生きとつとは一人。頼らるつとは自分だけだけん。どぎゃん辛かめにおうても、やるしかなか。わき目もふらず進むしかなか」「お前は自分を信じて進みなっせ」「本当に泣きたかときは、誰もおらんとこっで一人で心ゆくまで泣け。そして、忘れなっせ」（山崎著上p36~40）

両親は人生の初期に必要な価値観をしっかりと伝えている。柴三郎の人生は、多くの恩人と少なからずの敵対する人が現れる。「恩人に感謝、敵者を忘れろ」との両親の教えを糧にして自分を信じて悠然と進んで行く。その道をたどってみよう。

2, 時習館での学び・1867年～1870年（14歳から17歳）

1867年（慶応2年・14歳） 細川藩の藩校「時習館」に入寮、軍人か政治家を志して柔道、剣道に励む。

時習館の名は①「学びて時に之を習う、亦説がしからずや。朋遠方より来る有り、亦楽しからずや。人知らずして怨みず、亦君子ならずや」からきている。

柴三郎の生涯を追うとき、凡人なら恨み骨髓に徹することに度々遭遇しているが、それらを泰然自若として受けとめ、恨みを抱かず、敵を忘れ（許し）前進している姿は、母の教えを強化している。学ぶことにどん欲であり、それを実直に実践している姿は幼少期の学びに由来すると思われる。

②「吾十有五にして学に志し 三十にして立ち、四十にして惑わず、五十にして天命を知り六十にして耳順い、七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰えず」

この言葉を好んだかどうかは分からないが、生涯をたどると、この言葉に則っていることを発見する。

時習館の教師陣には横井小楠の弟子が多く「柴三郎は横井小楠の弟子たちに囲まれて育っている。いわば孫弟子である。その国際性と現実重視の姿勢は有形無形に肌に染みついている」（山崎著上p76）

世界の動き、日本の変革を予期してオランダ語を熱心に学び、世界に羽ばたく準備をしていた。

3, 熊本医学所時代・1871年～1874年（18歳から21歳）

(1)恩師C.Gマンスフェルトとの出会い

1871年明治4年(18歳) 1月熊本古城医学所に入学、7月に最初の恩師C.Gマンスフェルト（1832年～1912年）に出会う。（緒方正則も入学する）

マンスフェルトはオランダの海軍軍医。1866年徳川幕府に招聘されて来日、長崎「精得館」（館長は長與専齋）で5年間、医学の基礎と臨床を教え、患者の診察をした。明治4年熊本医学所及び病院に3年契約で招聘され教鞭を執り、患者の治療も行った。

マンスフェルトはオランダ語を解し熱心に学ぶ北里柴三郎を目に留め、夜間にはマンスフェルトの家で特別講義を行い、2年目からは講義の通訳を命じた。（38歳になった柴三郎は1891年明治24年オランダで再会する）

明治維新で精得館が長崎医学校と変わった際に、長與專齋（柴三郎はまだ面識はなかったが、後年長與に助けられる場面が多い）はマンスフェルトと相談し教育制度の改革を行った。

柴三郎に目を付けたマンスフェルトであったが、柴三郎には医学を究める姿勢がないことに気づき「君は随分熱心に勉強しているが、将来本当に医者になるつもりで勉強しているのか」と直裁な質問をしてきた。柴三郎も正直に答えた「医師は両親に勧められました。本当は軍人か政治家になりたいのですが、反対されました」

マンスフェルトは二つのことを柴三郎に説いた。

自分は教師の役割については次のように考えている。

①「学生を医者にしたてようとするものではなく、単に学生が将来の研究において、その行くべき道を示し、又、将来単独にて自ら研究すべき方法を教えるものである」

②「古来から偉人が頭脳の限りを尽くして病気の根絶に取り組んできたが、未だに征服できない病気がたくさんある。私が在任中はできるだけの便宜をはかるから、毎日を疎かにせず医学の勉強に励むといい」

この絶妙の助言に柴三郎の心は躍った。そして顕微鏡のとりこになった。

しばらくして、マンスフェルトは

「北里君、どうやら君は医学の面白味を発見したようだね」と声をかけてくれた。このときから柴三郎にとって、医学は価値ある学問として生涯の志の対象となった（山崎著上p45-46）

後年の話になるが1886年（明治19年）ベルリン大学コッホ研究所に留学するが、コッホの親愛なる弟子であるレフレルから「君はなぜ医者にな、それも細菌学を学ぶ気になったのかね」と効かれた時、柴三郎は「顕微鏡です」と答えている。留学の希望の芽がここにあった。恩師コッホもまた同じ動機で医者になったことを聞かされ力づけられた（同著p156）



柴三郎は1874年（明治7年）7月（マンスフェルトの契約満了）まで時習館に残り通訳を務めた。亦「いにしえの良き教えを学び、実践することこそ喜びである」後に「研究は目的の如何に関わらず、実際に役立つ医療・予防の上に結実されるべき」と説き、予防医学に取り組んでいく。東京大学医学部在学中に記した『医道論』の中で、「人民に摂生保健の方法を教え体の大切さを知らせ、病を未然に防ぐこと」と、予防医学の重要性を説くことになる。マンスフェルトは柴三郎の医道への道を決定づけた恩師である。

(2)緒方正則との出会い

緒方 正規（おがた まさのり）も熊本医学所に入学、柴三郎と共に学び、後年、柴三郎の上司となり、ドイツ留学を勧め、紹介状を書いてくれた級友であり論敵ともなった。

緒方正則（1853-1919）の略歴

生まれた年は柴三郎と同じ、郷土も肥後国と同郷である

二人が初めて会ったのは1871年熊本古城医学所入学のときである。緒方は中退して1872年（明治7年）東京医学校に入学（この翌年森鷗外も同じく入学している）（推定）

1880年（明治13年）卒業、成績優秀でドイツ留学、ミュンヘンで2年、その後コッホの直弟子であるフリードリッヒ・レフレルに細菌学を学ぶ。1884年12月帰国、1885年（明治18年）内務省に入り東京試験所初代所長、ここに入局2年目柴三郎が部下となって働く

4，東京医学校時代・1875年～1883年（22歳から30歳）

(1)入学の秘密

1874年（明治7年）9月上京、同郷の21歳先輩、山田武甫（横井小楠の弟子）に下宿させてもらい受験勉強に励む。ここで受験資格が問題となった。大学予科の受験資格が20歳以下となった。受験の年には柴三郎は22歳である。マンスフェルト契約終了まで通訳を手伝い師に忠誠を果たした為であった。



この問題は思案の上、山田先輩の智慧で2歳年齢を下げて書類を作ることでその場を凌いだ。

森鷗外は16歳でありながら2年年齢を増やす操作をし受験に合格した。東大医学部を最年少で卒業したことで有名である。森鷗外は当時は森林太郎であり、後にドイツで柴三郎のもとで学ぶことになる。

(2)在学中の活躍ぶり

①アルバイト先に縁あり。

1875年（明治8年）東京医学校に入学したが、親元からの仕送りは断り、学費の工面のみならず弟の教育費を稼ぐためにアルバイトをしなければならなかった。見つかったアルバイト先、長養軒という牛乳会社で、精励し、幅広い仕事をこなし、牛乳の取り扱いから細菌学研究に芽生えた。指導力、研究熱心に働き社長の目にとまった。社長は松尾臣善の弟であった。柴三郎は卒業式の前にお見合いをさせてもらって松尾臣善の次女席（とら）と結婚することになる。

②弁論活動

板垣退助が自由民権運動を始め街頭演説や大学構内でディベートが盛んになって、天下国家を論じることは大学の風潮となっていた。親分肌の柴三郎は弁論を鍛えるために十数名の学生からなる「同盟社」を結成した。毎週土曜日に演説会を開き政治、経済、外交、教育等の討論会を開き講義録は印刷し論文へと発展するものもあった。

世相は西南戦争の始まったころ、物価高騰が烈しく、新政府への批判が高まってストライキも盛んになっていた。血気盛んな学生はストライキに参加した。時に議論は喧嘩や蛮行となって大学側をこまらせた。時の学長は長與専齋であった。彼は適塾の塾長を福沢諭吉から引き継いだ人物で、この騒動の解決を福沢諭吉に相談し援助を得ることになった。それほどに弁論部の活動は良かれ悪しかれ学内に影響力をもつに到っていた。

明治29年のある日、三宅秀医学部長は演壇に立つ柴三郎の姿を見て論旨に耳を傾けた。弁論の内容は概略次のようであった。

「医者は誇りを持たねばならない。今の医者は自分の栄華だけを祈り、高貴富豪の前では揉み手をして卑下している。こうした迎合の態度は少しも医道を進歩させない」「医学を志す人間は、医術を究め、理論と技術を共に徹底して研究し、大衆と国家の健康に貢献しなければならない。それを怠っているから医者、巫者、坊主と軽蔑されるのである」

「医師は病を未然に防ぐのが医道の基本である。人民に摂生と保健の方法を教え、健康の重要性を説かねばならない」

これらは柴三郎の予防医学の原点である「医道論」の原稿となった。この原稿は1877年の起草であるが柴三郎は繰り返し演壇からこの内容を訴えていた。

三宅秀医学部長は「あと一ヶ月もすれば卒業だ。君は同盟社で暴れていたようだが、演説はなかなかのものだった」と評価され、無事卒業できたのであった。



(3)結婚・松尾臣善の次女・帛（とら）と卒業

1883年（明治16年）卒業を前にした4月、アルバイト先の社長に気に入られた。その社長の兄が松尾臣善である。その次女・帛（とら）と見合いをして結婚。柴三郎30歳、新婦16歳であった。まだ学生的身であったので同居はしていない。柴三郎の実力はあったといえこの結婚は父の訓話の通り「運」を呼んでいる。父の教え

「世間に出て頼るとは、一人たい。ばってん、広か世間ば渡るとに一人の力には限りのある。運が大事か。何かばなしえた人物は運ば掌中におさめとる」その運ば引き寄せるには

「その方法はなか。王道もなか。ただ一心におのれの大望に邁進するだけたい。そぎゃんしょっと、不思議な話ばってん、そん姿ば見て他人は自然と寄ってくる」「助け人たい。助け人ん現る。成功者には必ず恩人がおるもんたい」

その年の4月東京大学医学部卒業 11月内務省医務局に仮入局した。

(4)妻・^{とら}厩と松尾臣善の人柄

松尾臣善（1843~1916）の人物を紹介しておかねばならない。

柴三郎が結婚した明治16年には40歳で大蔵省の官吏であったが、1903年（明治36年）10月、第6代日本銀行（1882年創立）総裁になり、7年8ヶ月に亘りその重責を担い、1911年（明治44年）高橋是清にその地位をバトンタッチした人物である。

時代背景を一瞥すると1902年日英同盟締結、1904年日露戦争、1905年ポーツマス条約、1906年満州経営の開始、1910年日韓併合と日本の亜細亜侵略が加速し、さすがのイギリスが同盟関係の密度を下げていった時代であった。「男、軍人、女は女工、糸を引くのは国のため」という、安価な女子労働が輸出を支え、海外市場を軍人が命をはって広げていく時代であった。

話を松尾臣善に戻そう。彼の仕事の座右の銘は「白湯を飲むが如くでなくてはならない」白湯は水でない、湯でもない。味はないが胃の腑には優しく流れ込む飲み物である。薬の服用には恰好である。飲み物としては主張しないか存在感はある。

仕事の進展は波瀾を起こさず、痕跡を留めず、当たり前になるようにして成ったという具合に仕上げなければならない。細心の注意と多大の努力を払う必要がある。職場では無用の混乱を避け、目立った行動は厳に慎まねばならない。人を押しのけて猪突猛進するのは最も忌み嫌った。次女・厩はそのような躰けで育てられていた。奥に強い芯のある優しい人柄で「ともすれば癩癪持ちの柴三郎を白湯の技でかわし、四男三女を育てた（山崎著上p78-79）。厩はこの家庭に育ち内助の功を発揮するのである。

5、内務省入局から留学まで・1883年～1885年（30歳~32歳）

(1)長與専齋との出会い

柴三郎はすでに内務省に入りたいくてその年1883年（明治16年）の1月からアルバイト学生として働いていた。

正式な入局に際して柴三郎の人生に大きな影響を与える人物との出会いがあった。

長與専齋衛生局局長であった。長與は柴三郎の学生時代の活躍を知っていた。

開口一番、長與は「その後、マンスフェルト先生と連絡をとっているかね」と聞いてきたマンスフェルトは熊本に来る前には長崎の精得館（当時のトップは長與専齋であった）に招聘されて教鞭をとっていたので共通の知人であった。又、長與専齋はマンスフェルトと共に医制の教育改革を行って入学試験に年齢制限をもうけて、それに苦しんだのが柴三郎であった。

長與は柴三郎の秀でた才能を熟知しており内務省に入局をさせたかった。

しかし、柴三郎の結婚を知っており、初任給の70円での生活は苦しいことも知っていた
 このころ医学士の大半は地方の病院や学校長となって月俸は200円であった。
 そのことを知って安月給でも入局する意志があるかを確認したのである。

長與「君は内務省で働きたいという話だね。何をやりたいのだ 薄給だぞ」と聞いた
 柴三郎「衛生局に入り、国民の衛生思想普及と健康増進に寄与したいと考えています」
 「それに、マンスフェルト先生との約束を果たしたいと思
 います」

長與「ほう、先生とどんな約束かね」

柴三郎「東京大学医学部で学べ。と、それと――」

長與「それと、何かね」促した。

柴三郎「欧州に來たれ。と」

長與「欧州――留学ではないか」

柴三郎「そうです。先生は欧州にきたれ、便宜ははかると
 約束してくださいました」

夢を話し長與の反応を垣間見た。

どんな困難が待ち受けていても、はっきりと意志表示すの
 が柴三郎の生き方であった。

長與「わかった。それでは、後藤新平の下で働いてもらおう」



後藤新平はこの年の1月に入局して活躍していた。1882年（明治15年）自由党総裁板垣退助が岐阜市で演説会の後暴漢に襲われ刺されたときに治療に当たったのが後藤新平であった。それを自慢にする猛者のもとで医務局の仕事が始まった。

1883年（明治16年）は真にめまぐるしい年であった。結婚・卒業・就職（入局）が重なった。この年の1月には留学から戻った後藤新平が同局に入局しており、先輩風を吹かすことになる。（後藤との関係は興味深く続いていく）

新婚生活が始まって間もなく柴三郎は妻に「時代の最先端をいく衛生学・細菌学の論文を書いてドイツに留学し、コッホの元で研究したい」と夢を語った。そして間もなく最初の長期地方出張の命がでた。

(2)最初の長期地方出張 1883年の晩秋？

新婚間もなく3ヶ月に渡る東北、北海道方面への視察長期出張命令がでた。目的は日本の近代化の目玉である衛生行政機構の点検指導であるが、エリートにとっては大名旅行であって、仮採用で見習い中の柴三郎は医師でありながら雑用係にすぎなかった。東京を出発して栃木、山形を経て秋田に入って事件は起きた。

登場人物の紹介

①永井久一郎権少書記官（部長クラス）――アメリカ留学帰りの秀で者、
典型的なエリート官僚。永井荷風の父

②太田実奏任御用係

③同僚の一人

殆ど会話には出てこない

④犬養毅

当時は秋田日報の記者

②「大変なことになりました」と青ざめた顔で永井に駆け寄る

①「何だ！その狼狽ぶりは！」手を大げさに組んでいる

②「秋田日報の記者から講演の依頼がありました」言葉は震えている

①「そんなもの断れ」相変わらす横柄な態度

②「しかし、相手は主筆の犬養毅です。演題は衛生講話です

①「そんなもの断れ！」エリートは特定の言葉しか知らないらしい

②「それが、有志や市民に知れ渡り、場所も決まっています。

我々が衛生講話が出来ないことを見越して無理を言っているのです」

永井を上目で、おそろおそろ本音を出す

①「何とか追い返せないのか」相変わらす横柄な態度だが、犬養と聞いて武者震いをする

②「無理です。高官にご講演を是非と動きません」永井を説得できず、いらだつ。

ナレーション

後に1・15事件で暗殺される「憲政の神様」と呼ばれる犬養毅は西南戦争で従軍
記者として優れたルポタージュを残している。政界では要注意の記者である。

長い①と②の同じようなやりとりが続くが名案は浮かばず行き詰まる。

しばしば長い沈黙

②「ここはもう北里君に頼むしかありません」始めから答えを持っていた。本音が出る

①「――あの男に！」驚くが、不快丸出し。相手をさげすむように

②「ここは、折れて彼に頼むほかありません」始めから分かっていることだ

沈黙

①「そうか、それしかないか――」

二人は柴三郎の部屋を訪れる

②「ちょっと、頼まれごとをしてもらいたい」（俺は上司だぞ）

太田は事情をかいつまんで説明をした

①「君が代読するのだ」半分脅している。この場にあっても俺はエリートだ。命令だ

柴三郎「それは、まずいでしょう」冷静に

①「まずい、それはどういう意味かね」少し動揺して聞き返す

柴三郎「私は 雑務を命じられております。下級の私があなたがたをさしおい
て公の席で演説するなどとてもできません」演説は学生時代に訓練して自信はある

①「講演はできないというのか」不機嫌にややおとなしく

柴三郎「できません。本官がいるのに私が講演などしましたらあなたがたに恥をかかせてしまいます」肥後モッコスを秘めながら、表向きは畏れ多い言葉遣いと態度

①「いや、それは考えなくていい」あくまで威厳をちらつかせて

②「永井さんの（命令は言葉を代えて）申し出がきけないのか」部下にはきつい口の利き方、中間管理職のよくやる忖度、申し出と言い直して歩み寄りを促している

柴三郎「私の仕事は、調査や視察の雑務です。それに専念したいと思います」正論

②「だから、今は緊急事態だ」よく官僚が国民を欺く常套の言葉

柴三郎「しかし、随行員としての仕事以外に手を出すのも、命令されるのも越権行為だと思います」

①「融通のきかない、分からん男だ。講話の代演を許すといっているのだ」

柴三郎「許す？ なんばいいよっと」堪忍袋の緒が切れた柴三郎は肥後弁になって怒った

そのとき、宿の女将が現れて「お客様が、いつまで待たすのかと大変な剣幕です」と迷惑そうに言った。玄関の方からは犬養が「何をしている！」と叫ぶ大声が聞こえる。

沈黙

①「どうだろう、北里君、講話の代演に、許すも許さないもない。わたしの恥なども問題にしないでいい」静かな物言いだった

柴三郎「どぎゃんこっすですか」肥後弁で応じる。まだ頭にきておさまらない

①「住民が待っている。とにかく明日の衛生講演会を無事終えねばならない。代演してもらいたい」永井は決裂を恐れてエリート意識をいったん閉めた

柴三郎「ぜひと懇願されるのですか」住民が待っているという言葉が彼を冷静に戻したが、更に相手の態度を確認する

①「そうだ」永井は頷いた、そして、畳に正座して「この通りだ」と頭を下げた。

柴三郎「分かりました。やりましょう」といって引き受けた。相手がそれほどまでに折れてくるのなら、医者としての役目を果たさなければならない。

この結論に犬養も驚いたことだろう。そして若造の手前をみることにして夜が明けた。

翌日の衛生講演会には住民が集まった。学生時代に弁論部で鍛えた体験のある柴三郎は堂々と代替の役割を果たした。公演後

犬養「いや、立派な講演でした。感服しました」と駆け寄ってきて握手を求めた。

その夜、講師を慰労する小宴では、柴三郎が中央に座り、永井と太田は末席に並んだ。

これは犬養の配慮というか、永井と太田に対するあてつけであった。

柴三郎が高級官僚から嫌われる種が一つ播かれた大きな出来事であった

(3)緒方正則との再会・部下となりコレラ菌の共同研究をする

1884年（明治17年）1月柴三郎は局内異動で医事課への勤務となり、開業医を目指す者に試験を行いその合否を決める仕事に就いていた。乗り気のしない毎日であった。

明治9年来のコレラの大流行は日本の殖産興業政策の悩みの種となっていた。柴三郎はその原因をつかみ対策を立てたいと考えて、勤務の傍ら論文を書いた

- ①「蒼蠅は病毒伝染の一媒介者」（長與・三宅に評価される）
- ②「妊娠を鑑識する新法」
- ③「肝臓ジストマの発生する理由」論文を書くことは妻の帋との会話で出ていた。その目的は海外留学であった。

その年の9月8日内務省からやっと辞令がおりて「准判任官」月俸70円となった。

12月「時習館」時代の朋友「緒方正則」が留学先のドイツから帰って来た。

師走も押し迫ったある日、柴三郎は長與専齋から局長室に呼ばれた。

「来年1月から、緒方君が衛生局東京試験所で内務省御用掛として細菌学の研究を始めることになった」そこで一緒に研究するように命が下った。

1885年（明治18年・32歳）2月から柴三郎は東京試験場勤務となって、緒方正則の下で働くことになった（後藤新平から解放）

4月に新鋭緒方は脚気細菌説を大々的に発表し有名になる。柴三郎はこの説には納得はしなかったがこの段階では上司の批判はしなかった。（後日批判を発表して問題となる）

5月には二人で共著「鶏コレラ菌に関する論文」（日本最初の細菌学研究論文）を発表して長與専齋からも高い評価を得た。

8月柴三郎は赤痢の発生した四国へ出張を命じられ、研究を重ね、短期間で赤痢菌の概要をつかんでいた。（この成果は明治30年高弟、志賀直哉により赤痢菌が発見され世界に公表された）更に長崎県にコレラの第3波が起こって猛威を振るった。9月20日長崎港に到着、避病院に向かい研究し、前年コッホが発見した同じ菌を捕まえることに成功した。これは「長崎県下コレラ病因の談」として書かれ後日公に発表された。細菌学者・北里柴三郎の誕生を告げる画期的な報告書でもあった（山崎著上p128）

(4)ここで、しばしば登場する長與専齋について記す

長與 専齋（1838年～1902年）、日本の医師、医学者、官僚。

肥前国大村藩（現在の長崎県大村市）に代々仕える漢方医の家系に生まれる。

大村藩の藩校である五教館で学んだ後、1854年大坂にて緒方洪庵の適塾に入門し、やがて塾頭となる（福澤諭吉の後任）。のち大村藩の侍医となった。

1861年、長崎に赴き、医学伝習所にて、オランダ人医師ポンペのもとで西洋医学を修める。ポンペの後任マンスフェルトに師事し、医学教育近代化の必要性を諭される。明治元年（1868年）、長崎精得館の病院長に就任する。明治維新により同館は長崎医学校と

なった。マンスフェルトと共に、自然科学を教える予科と医学を教える本科に区分する学制改革を行った。

明治4年（1871年）、岩倉使節団の一員として欧米に渡り、ドイツやオランダの医学および衛生行政を視察した。

1873年（明治6年）に帰国。

1874年（明治7年）文部省医務局長に就任する。また東京医学校（現在の東京大学医学部）の校長を兼務する。同年、国民の健康と衛生を守る官営の検査機関「東京司薬場」（国立医薬品食品衛生研究所の前身）を創設した。

明治8年（1875年）、医務局が内務省に移管されると、衛生局と改称して、初代局長に就任する。この年の11月北里柴三郎が入局する、1885年の柴三郎の留学にも寄与するコレラなど伝染病の流行に対して衛生工事を推進し、また衛生思想の普及に尽力した。

「衛生」の語は、Hygieneの訳語として長与が採用したものである。

、元老院議官、貴族院勅選議員に就任の後、1891年（明治24年）に衛生局長を退官。その後も、宮中顧問官、中央衛生会長などを歴任した。、種痘の普及に甚大な功績があった。柴三郎とはマンスフェルトと共に師とする流れがあり、就職、留学に尽力をした

6、留学時代・1886年～1892年（33歳から39歳）

(1)留学決定に至るまで

1885年11月4日、長與専齋から留学の辞令を渡されるが、決定に至るまでには紆余曲折があった。この年ドイツ留学は長與の推薦で中浜東一郎（ジョン万次郎の長男）が決まっていた。ところが1884年に東京衛生研究所で柴三郎が書いた論文が高い評価を受けて、

「細菌学と衛生学を研修させるなら、省内の北里」という意見が出てきた。初代所長の緒方は同郷のよしみも有り強力に推薦した。予算は一人分しかなく、追加の留学生は困難であると長與は考え、身内のように近い柴三郎を追加推薦することを控えていたが、省内の意見におされて山県有朋に顔の利く石黒 忠恵（いしぐろ ただのり）に相談し、会計課長を説得して二人分の予算を取らせてやっと実現した。

柴三郎はベルリンの念願のロベルト・コッホのもとで細菌学を学ぶため、中浜は衛生学で世界的権威のミュンヘンのペッテンコーヘル教授のもとへ留学生となった。

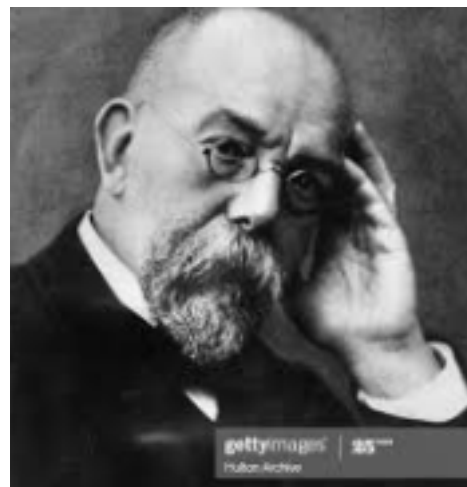
派遣期間は3年であった。

(2)コッホ博士の略歴

1886年（明治19年）1月底冷え厳しいベルリンに着いた。柴三郎は緒方正則の書いたレフレル宛の紹介状をもっていた。（レフレルはコッホの弟子で緒方の指導者であった、コッホの信頼厚く1883年ジフテリアの病原菌を発見している。後に第3代コッホ研究所所長となる）

- ・ ロベルト・コッホ博士（1843~1910）略歴
- ・ 1843年、ニーダーザクセン州の炭鉱町クラウスタール生まれ、父は炭鉱管理人、自然科学に興味をもちゲッティンゲン大学に入学して医学を学ぶ。

- ・ 卒業後は人口3000人のウオルシュタイン（現在ポーランド）の地区保険医官となった。ここで公衆衛生の指導、病院の監督等に公務をこなしながら、臨床と研究に明け暮れた。
- ・ 1876年、生物学の世界的権威者だったフェルディナント・コーン教授に炭疽菌の実験をさせてもらいたいと手紙を書いた。教授はそれを読んだ。そして実験を許した、見事であった。この一瞬によってコッホは世に出た。そして細菌の純粋培養に成功し、特有の菌が特有の病気を発病させるという仮説をたてた。後にコッホ四原則と確証された。
- ・ 1880年、ベルリン王立保険庁の幹部となり、新設の細菌研究所の所長となる
- ・ 1882年3月24日、結核菌を発見した。ヒトにおいて炭疽菌と同様に病原性の証明を行って、論文『結核の病因論』を著し、ヒトにおいても細菌が病原体であることを証明した（後にこれを記念して、3月24日は世界結核デーと制定された）。
- ・ 1883年、コレラ菌を発見、その病原性（伝染病）と主張した
- ・ 1885年、ベルリン大学で教鞭を執り、北里柴三郎も加わり
- ・ 1890年、結核菌の培養、ツベルクリン（結核菌ワクチン）を創製。当初は治療に使用することが目的で、自身がモルモットになる命がけの自己実験したが効果がなかった。現在では診断用のみに用いられている。
- ・ 1905年、結核に関する研究の業績よりノーベル生理学・医学賞を受賞。
彼の弟子として、
 - ゲオルク・ガフキー - 腸チフス菌を発見した。
 - フリードリヒ・レフラー - ジフテリア菌の分離に成功し、口蹄疫ウイルスを発見した。
 - エミール・ベーリング - 血清療法の研究により1901年ノーベル生理学・医学賞を受賞した。
 - パウル・エールリヒ - 化学療法の研究により1908年ノーベル生理学・医学賞を受賞した。
 - 北里柴三郎 - 破傷風菌を純粋培養し、血清療法を発見・確立し、ペスト菌を発見した。
- ・
- ・ 1908年、北里に招かれ来日。
- ・ 1910年、ドイツ南西部のバーデン＝バーデンで逝去。66歳没。



(3)コッホ博士から与えられた課題

1886年(明治19年・33歳) 1月ベルリン大学、コッホ博士に師事する。

柴三郎の目的は、当時の日本を悩ましていたコレラの研究（予防と治療）であった。

コレラ菌は1883年コッホによって発見されていたが、コッホ本人は「菌は発見されたが、未知の部分に支配されている。これからまだまだ研究しなければならぬ伝染病だ」といった。コッホは柴三郎の希望に従って課題を与えた。

①「チフス菌及びコレラ菌の含酸或いは含アルカリ培養基における関係」

細菌学上未知の課題であった。研究結果は1888年ドイツ医学専門雑誌に掲載された。柴三郎が外国専門雑誌に発表した最初の論文であった。

②「コレラ菌について。a.乾燥及び温熱に対する抵抗力、b.人糞中の生活、c.乳中における関係」

③「人工培養基上における病原及び非病原菌に対するコレラ菌の関係」

コッホ博士は柴三郎の熱心な研究姿勢に感服し、酷使する肉体を案じながら「しばしも怠ることなかれ」と次々と課題を与えた。

(4)森鷗外との出会い、1887年（明治20年・34歳）

4月に森林太郎（鷗外）が柴三郎を訪問、目的はコッホに会わせて欲しいとのことである。森は1884年8月からドイツに留学滞在していた。当時彼は中浜東一郎（ジョン万次郎の長男）と共にミュンヘン大学でペッテンコーフェル教授のもとでコレラ菌について研究していた。

当時コレラ菌の生態について2つの異なった研究がなされており、コッホとペッテンコーフェルは犬猿の仲であった。

森はペッテンコーフェルの元での研究に嫌気がさして、コッホのもとで細菌学を学びたいとコッホに願い出、柴三郎の紹介で5月末に受け入れられて「ベルリン下水道の細菌検査」という課題を与えられた。森はこの課題にも不快をもっていた。

7月、思いがけない悪事態が起こった。留学の筋道をつけてくれた石黒 忠憲（山県有朋を後ろ盾として力がある）がベルリンにやってきて、突然、柴三郎を呼びつけた。その席上に既に森鷗外がいた。

「ミュンヘンのペッテンコーヘル教授の下にいる中浜東一郎と交代せよ」との命令であった。柴三郎は苦闘しながら、並ならぬ抵抗をした。なだめる森にたいして「辞める」とキッパリ言った。肥後モッコスは一度決めたら後へは退かぬとの構えをしめた。

頑強な抵抗にあった石黒 忠憲は密かにコッホにあって柴三郎の実情を聞き出した。コッホも又、柴三郎を



図 1888年6月3日、ドイツにて(文京区所蔵)
前列左端が河本重次郎、中列左端が森 鷗外、中列右から二人目が北里柴三郎

手放す意志はまったくなく、石黒 忠恵は折れざるを得ず。柴三郎のコッホ研究所での在任がしぶしぶ認められた。

この年の11月森鷗外はコッホの元を離れプロシア隊付医官となった。

(5)緒方正則の脚気細菌説を批判する・1888年（明治21年・35歳）

①オランダの病理学者ペーケルハーリングの脚気論を批判

実験生活が続ける柴三郎は看過できない論文に出会った（同著p191）

オランダの病理学者ペーケルハーリングの脚気細菌説（脚気の原因となる細菌を発見した）である。これと同じ説は緒方正則が1884年柴三郎がその部下であったときに大々的に発表していた。入局2年目の新米が留学帰りの博士の学説を批判はできなかったが、内心では納得しないで疑問を抱き続けていた。

このことをレフレル（緒方の指導した）に告げた。レフレルの忠告は次の通りであった
「ドクトル北里、学問の世界で何が一番大切だろうか。真実だ。私情をはさむのは不徳だ。私がもしも、コッホ先生に間違いがあったなら、迷わずそれを指摘する。先生はそれを怒るだろうか。おそらく、非を認めて、むしろ感謝すると思う」

かくて、柴三郎はペーケルハーリングの実験の不備を突いた論文を、ドイツの細菌学中央雑誌に発表した。そして緒方正則を批判する論文も書いた。ペーケルハーリングは、1年後自らの非を認め、コッホ研究所を訪れ柴三郎に感謝の意を伝えた。レフレルの言葉の通りとなった。

②緒方正則の脚気論を批判

1888年3月日本では大批判が起きた。先ずドイツにいた森鷗外が非難の先鋒をきった。東京大学総理の加藤弘之は、大学の総意を代表して。「師弟の道を解さざる者」と酷評した。森と柴三郎の論争は翌年まで続いた。その結果、柴三郎は反東大派のレッテルを押され帰国後に冷遇されることになる。

柴三郎にはこのような論争に巻き込まれる暇はなかった。留学の終わりが年末迄であったが、コッホから与えられていた研究(2)の③は道半ばであった。延長が必要であった。延長依頼はこのような論争中になされた。コッホ博士の尽力によって5月、長與専齋（内務省衛生局長）から承認の手紙を受け取った。

(6)そして、破傷風菌の純粋培養に成功する。1889年(36歳)

多くの世界の学者が未踏であったので、コッホ博士は「もしーもし北里君が破傷風菌の純粋培養に成功したなら、これは細菌学界において最高の勲章に値するものである」と珍しく興奮して言った。

柴三郎は寝食をわすれ実験、研究に勤しむこと1年、破傷風菌の純粋培養に成功した。世界初の偉業の達成であった。

1889年（明治22年・36歳）4月27日第18回ドイツ外科学会で「破傷風の病原体について」と題して講演し、世界に破傷風菌の純粋培養を伝えた。（p224）

(7)抗毒素、「抗体」の発見と治療法の発明。1890年（37歳）

破傷風菌の純粹培養成功に到る過程で

「これまでの細菌学の研究では説明できない不思議な現象に出会っていた」

この「何かを問う」感性が治療法の予見であった。この研究の過程で「北里式細菌濾過装置」と「北里式鼠固定器」を発明した。

1年半かけての実験研究の結果「破傷風免疫動物の血清のなかには、破傷風の毒素に対抗してこれを無害にする物質がある」ことを確認した。この物質を「抗毒素」と名づけた。今日でいう、抗原抗体反応の「抗体」にあたる。柴三郎は世界初の抗体発見者である。（p231）

コッホ博士はただ驚くばかりであった。そして、これは「免疫血清療法的基础」となると考えベーリングと共に実験を続けるように指示した。



(8)エミール・ベーリングとの共同研究

エミール・ベーリングは1889年コッホの元にきて、ジフテリアを研究していた医学者であった。柴三郎が発見した破傷風の抗毒素の研究をジフテリアに応用するというのがコッホの指示であった。

二人の研究は、「免疫血清療法」の夜明けを告げる。

1890年（明治23年・37歳）12月「動物におけるジフテリア免疫と破傷風免疫の成立について」共著論文を「ドイツ医事週報」に発表した。世界に向け「血清療法」を発表したのである。（1901年ベーリングは第1回ノーベル医学・生理学賞を受賞）



(9)1890年はコッホにとっても重要な年となった。

8月コッホ博士は突然「結核の治療薬の展望」を発表した。

「結核の治療について、有効な物質を発見し目下実験中である」「しかしながらこの新薬はまだ自ら満足できる試験を経ていないので、名前はついていない」発表には不本意であった。（コッホは国家的圧力で発表を急がされていた。新薬と政治の結びつきはどこの国でもあるものらしい）

やがて、その名を「ツベルクリン」とコッホはつけた。そして、自らモルモットになって魔法の液体を自分の体に打った。高熱と意識障害で苦しみ門下生たちは師の回復を諦めたが翌日は熱が下がり、三日目には疲労感や注射箇所の赤味も消え、回復した。

さらに臨床実験をかさね論文にまとめ発表した。イギリスのアーサー・コナン・ドイルはドイツに来て取材をかさね「ツベルクリンの診断薬としての可能性は認めるものの、結核の治療に用いる療法には懐疑的だった。むしろ否定的である」と喝破した。

コッホ博士がその療法を発表したのは1891年1月であった。

(10) 日本政府の反応

日本政府はこの新薬法を早く学びとって日本の医療に生かしたいと熱望していた。8月たまたまヨーロッパに滞在していた東京大学の医学者3人をコッホ博士のもとに遣わして学びを乞った。コッホは「私はドクトル北里にツベルクリン療法の何であるかをすべて教えている。いや、共同研究している。であるから、御国の研究者はドクトル北里に教えを乞うて欲しい」と言った。

プライドを傷つけられた3人は、北里に恨みをいだいた。この事件は、1887年の緒方正則との論争と共に柴三郎の帰国後、東大系と北里との確執に影響をあたえた。

もう一人の日本人がやってきた。後藤新平である。柴三郎が入局した時の上司であって当時、柴三郎はあまりいい感じを抱いていなかった。後藤は細菌学と衛生学を学びたいとコッホに直接願い出ていた。コッホは後藤との面談が終わった頃に柴三郎を呼び出して3人での会話となった。（この強引さが後藤の特長である）

両者の間で師弟関係の逆転となったのであるが、後藤は頭を下げて柴三郎に教えを乞った。この後藤が、柴三郎の留学の再々延期の介在をして、1892年1月迄の延長と宮内庁から1000円の御下賜金を頂き、最後の研究、ツベルクリン療法に没頭した。この最後の延長に尽力してくれたのはコッホ博士と日本側は長與専齋（内務省衛生局長）であった。

コッホ博士は北里柴三郎に医学博士の学位を授けた後

「疲れたからしばらくエジプトに行く」といって研究所をはなれた。（ベルリン大学も辞職した）翌年ドイツ政府はコッホのために最新の研究所の建設し所長として迎えた。

エジプトに旅立つ前にコッホと柴三郎の二人の間に有名な会話があった。

「細菌学は国民の杖とならねばならない」

(11) 北里柴三郎、ケンブリッジ大学からの招聘を断る。1891年（38歳）

1891年（明治24年）、コッホ博士の留守中に柴三郎はイギリスのケンブリッジ大学から新設する細菌学研究所の所長に勧誘を受けたが、迷うことなく断り、ツベルクリン療法研究の完成に励んだ。最後までコッホ博士に対して忠誠を貫いた。

7月イギリスで開催された第4回万国衛生会議に出席するおりにオランダに行き、恩師マンズフェルト先生を訪問した。お互いに懐古の情に満たされた感動の再会であった。恩返しを忘れない柴三郎の生き方はぶれることなく生涯続く。（1908年コッホ博士夫妻を日本に招く・後述）

(12) パスツールに会って、米国を經由して帰国する。1892年（39歳）

1892年3月、コッホ博士に別れを告げ、政府の要請通りフランスに渡りパスツールと懇談した。ルイ・パスツール（1882-1895）は細菌学の開祖と言われている。医学者ではなく化学者である。

1857年、牛乳が酸っぱくなるのは、それまで考えられていた内部的な変化（自然発生説）ではなく、微生物の活動によると主張した。微生物のパイオニアである
スーブは自然に腐るのではなく、外から侵入する微生物（細菌）が増殖して起こる
パスツールは肉汁のスープなどを用い、液体の培地によって微生物の研究をした。
微生物が病原体である可能性を示唆したが、細菌の純粋培養（一種類の細菌を単独で培養）できなかったため病気と細菌の因果関係を証明できなかった。

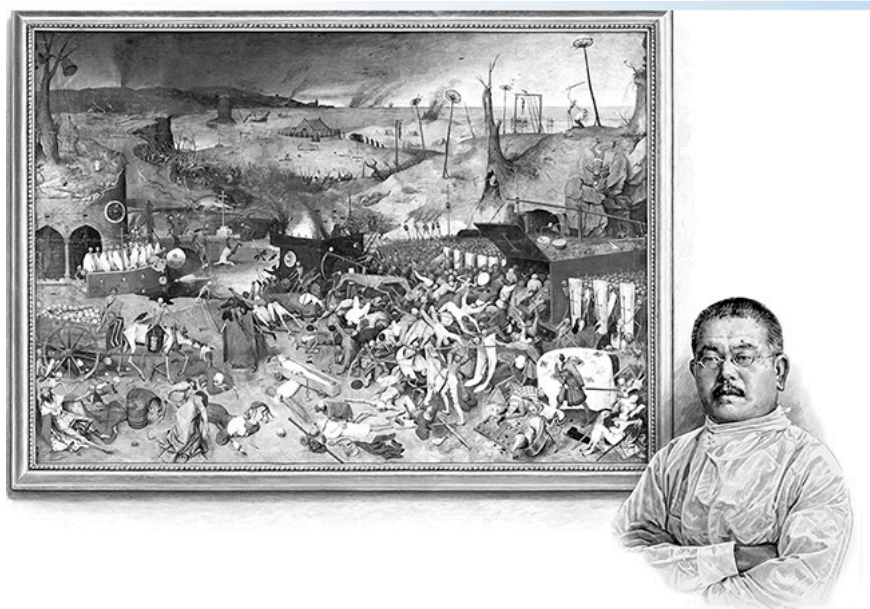
コッホはゼラチンを用いた固体の培地を考察し細菌の純粋培養（単一の種類の菌や下等な藻類を取出して培養すること）に成功し、コッホ四原則を作り出した。柴三郎はこの原則に忠実に研究を進めて業績をあげた。

パスツールは数々の名言を残しているが「科学に国境はないが、科学者には祖国がある」はコッホにも、柴三郎にも共通する生き方であった。パリで初対面の二人は互いに尊び、励まし合って別れた。二人の近代細菌学の大御所に知己を得た柴三郎の感激はいかばかりであったろうか。

留学をさせてくれた日本に祖国愛に燃えて帰国したが、彼を待っていたのは冷徹な―――であった。次号に続く



ピーテル・ブリューゲル「死の勝利」 ペスト



2, アベノマスク466億円の謎

(1)億・兆の表示の仕方

1億は100,000,000です。0が8個ありますので→→ 10^8

1兆は →→→→→→→→→→→→→→→→ 10^{12}

(2)1世帯あたり、いくらになるか

多くの国民が知っての通り、安倍のhujouという悪影響が乗り移っているマスクは不潔極まりない。不潔を取り除く費用が8億かかるそうだから総額は474億円となる
50,000,000 (=0.5億) 世帯に配るらしい。

1世帯あたりの計算方法は

$$\frac{474 \times 10^8}{0.5 \times 10^8}$$

簡単に、 $474 \div 0.5 = 948$ 円となり、1枚は474円

(3)説明責任が果たせない「アクママスク」

未だに届きませんが5月24日薬局で買ったマスクは10枚で594円でした。

アベノマスクは物理的にも不潔ですが、闇の心が充満しており、誰も説明責任を果たせない「アクママスク」と言えるでしょう。すべての製造者をスピード感をもって明らかにすることができず、契約書も示せず、閣議決定に誰も反対できず、ぶかつこうを強いられる良識ある国民は怒っています。返品したいですが、郵便局に迷惑がかかりますから、仕方なく処分に困っている人が多いです。

(4)「アクママスク」2枚でで病院が建つ

474億円即ちアクママスク2枚で何ができるか。

マスク2枚の節約で素晴らしい病院が建った。

最近、オープンした横浜市立病院。移転整備総事業費482億円地下2階地上7階、管理棟は地上4階建て。

診療棟は免震構造で病床数650床。想定外来患者数は1日1200人、診療科数は33



診療棟の外来フロアとなる地下1階と1階には小児外来や救命救急センター、がん検診などを配置。2階が救急病棟、集中治療室（ICU）などで、3階から7階が入院病棟。病室の多床室は6床から4床に減らし、1床当たりの面積を拡充する。駐車場は医療従事者ら職員用を含め400台分に増やす。



(5)一人10万円の合計は？

次に一人10万円を日本の最新人口推計1億2590万人に配ると総額いくらになるかを頭に入れて政府予算をみると何かが見えてくるかもしれません。

100.000→→→→→ 10^5 1億2590万は→→→→→ 1.259×10^8 をかけると 1.259×10^{13}
 $=12.59 \times 10^{12}$ （兆） 12兆5900万円です。

(6)政治家とはなにか

真剣に考えなければならない。

よく聞く言葉に「安倍首相を選んだのは国民の責任だ」といい、多くの人が「自分たちが選んだのだから仕方がない」と言う。果たしてそうであろうか。

それは選挙構造の結果であり、国民の意思は反映されていない。

首相は国民の直接投票で選びたい。代議士は比例選挙にして民意を反映しやすくしたい。

代議士始め議員と呼ばれる人の数を人口減少に合わせて減らしたい。検察庁の中に議員の違反者を立憲する特別捜査部門を創設したい。

これらの為には憲法改正が必要になるだろう。第9条と基本的人権の尊重を不変として憲法の改正が必要である。改憲派と護憲派の争いではなく、すこしでも民主主義の理想に近づけたい。

現在生きている政治家が守らなければならないことは1985年の政治倫理に定められている

私たちはこの政治倫理綱領にそって政治家を観察しなければならないと思う。

(7)政治倫理綱領（衆参議院共通）

政治倫理綱領は、1985年六月二十五日次のとおり議決された。

政治倫理綱領

政治倫理の確立は、議会政治の根幹である。われわれは、主権者たる国民から国政に関する権能を信託された代表であることを自覚し、政治家の良心と責任感をもつて政治活動を行い、いやすくも国民の信頼にもとることがないよう努めなければならない。

ここに、国会の権威と名誉を守り、議会制民主主義の健全な発展に資するため、政治倫理綱領を定めるものである。

一、われわれは、国民の信頼に値するより高い倫理的義務に徹し、政治不信を招く公私混淆を断ち、清廉を持し、かりそめにも国民の非難を受けないよう政治腐敗の根絶と政治倫理の向上に努めなければならない。

一、われわれは、主権者である国民に責任を負い、その政治活動においては全力をあげかつ不断に任務を果たす義務を有するとともに、われわれの言動のすべてが常に国民の注視の下にあることを銘記しなければならない。

一、われわれは、全国民の代表として、全体の利益の実現をめざして行動することを本旨とし、特定の利益の実現を求めて公共の利益をそこなうことがないよう努めなければならない。

一、われわれは、政治倫理に反する事実があるとの疑惑をもたれた場合にはみずから真摯な態度をもつて疑惑を解明し、その責任を明らかにするよう努めなければならない。

一、われわれは、議員本来の使命と任務の達成のため積極的に活動するとともに、より明るい明日の生活を願う国民のために、その代表としてふさわしい高い識見を養わなければならない。

(8)直近ニュース

埼玉・深谷市立中が政府配布マスクの着用求める

5/25(月) 16:38配信・産経新聞

政府が配布した布製マスクの着用を強要するようなプリントを埼玉県深谷市の公立中学校が作成し、保護者に配布していたことを明らかにした。文部科学省を通じて事実関係を確認した。

プリントには27日の予定などが記載されており、新型コロナウイルスの感染防止の観点から、「アベノマスク着用（別のマスク着用生徒については携帯しているか）の確認」「アベノマスクを忘れた生徒は少人数教室に残る」などと記載されていた。

5月27日（水）の予定		窓は開放状態		
時間帯	9:00~10:20	10:30~11:50	13:00~14:20	14:30~15:50
席番号	28~37	19~27	10~18	1~9
1 健康観察カード（緑色）の確認・・・保護者印の確認 <u>アベノマスク着用（別のマスク着用生徒については携帯しているか）の確認</u> 2 提出物の回収 (1) 国語・・・語句ノート (2) 社会・・・教科書プリント3枚、学習プリント (3) 数学・・・関数2（ピンク表紙）、平方根表（黄色） (4) 理科・・・22日に提出できなかったもの (5) 英語・・・22日に提出できなかったもの				

“アベノマスク”を強要か 野党が問題視

主要野党は25日、ツイッター上のプリントの事実関係の確認を文科省に要請。文科省が埼玉県教育委員会などに事実関係を問い合わせたところ、深谷市内の公立中学校で布製マスクの着用を義務付けるような表現のあるプリントを配布したことを確認した。

川内博史衆議院議員は「安倍晋三首相は国家主義的な思想、政治哲学を前面に押し出しながら、これまで政権運営をしてきた。『アベノマスク』をあがめ奉っているごとな書き方がしてあることにも、そういう一端が出ているのではないか」と語った。

立民の黒岩宇洋国対委員長代理は「一国の首相に忠誠心を無理強いするようなことが現代に起こっている」と批判した。

あとがき

時事問題を追いかけるとなかなか締め切れないで困ります。

検察庁関係の問題はベストピア3月号で当時の情報を吟味して書きました。5月25日時点で検証しても間違いありません。賢人と言われる方々にはもっと早く立ち上がって欲しかった。カミュの「ペスト」からペストの下で喜んでいる人がいることを書きました。2月号では予算を削られて困っている国立感染研究所の人の話を書きました。むなしくなります。旧約聖書の智慧文学に属する「コレヘトの言葉」が新しく改訳されて、冒頭の文が「コレヘトは言う。空の空 空の空 一切は空である」となりました。「空」をめぐるのは仏教と内容がこととなりますが、わたしは、コレヘトに続けて言いたい「空の空。空の空。一切は空であり、かつ虚である」虚の解釈も限りなくあるようだ。今は矜持ある日本の研究者による「ワクチン」の一日も早い開発を祈ります。